

せたかむし

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
— 第一号 —
平成元年十一月一日

創刊に当りたつて

古平町史編纂委員会
委員長 越中庄司

この度、古平町史第三巻の編纂が再開されたのを機に、この郷土——古平の歴史を掘りおこしながら、それにまつわる話題を提供することによ

つて、郷土の歴史をより身近なものとして知ってもらいたいと考えておりました。そして、ひいてはそのことが町の活性化にもつながるのでは

発刊に

期待して

古平町長 畑沢民之助

青い海、緑の山、祖先が血と汗で築いた我が郷土の歴史は、少なくとも三八〇年の昔に逆上らなければなりません。その様

相は複雑多岐にわたり、真髓を探究するためには、広い分野にわたつての資料を必要とするものです。本町の歴史に対する意識の高まりを求めて、今回「せたかむし」を発刊することになりました。町史第三巻の発刊に当たつても先人の苦勞を偲び、建設と発展への勇気を奮い起こす明日への跳躍台にしなければなりません

なからうか、というひそかな期待を抱いております。幸いにして、共にこの道を歩もうとする町民の皆さんからの関心と理解が得られ、将来にわたつてのご支援をいただければこれに過ぎるものはありません。ともあれ、その意欲に満ちた船出と、所期の目的が達成できますことを願ひながら、創刊に当たつてのご挨拶いたします。

ん。新しい歴史を積み重ねこれの後世に譲りたいと思ひます。町民皆様からの貴重な資料の提供をお願いし、発刊に当たつてのご挨拶いたします。

今月の出来事

昭和期=四十二年まで)

■積丹半島漁港・鉄道期成会が発足 (二年)

■数十年来の暴風雨で漁船九八隻家屋二一六戸被害(〇年)

- 種田富太郎が積丹へ自動車を運 (一一年)
- 余市・古平間を絞龍丸(三八トン)が就航 (一四年)
- 五百羅漢が完成し開眼法要供養を執行 (同年)
- 優良多子(子供一〇人以上)家庭を国が表彰 (一五年)
- 古中PTAが発足(二二年)
- 小樽・古平間に金勝丸(七〇トン)が就航 (二三年)
- いか釣り漁船権正丸が遭難して六人死亡 (二五年)
- 新生婦人会が結成(二六年)
- 余市高校古平分校が古平高校として独立 (二七年)
- 廻り淵橋、泥ノ木橋が完成して渡橋式を行う。(三〇年)
- 新地分校校舎が落成、全国一大きい分校となる(三一年)
- みなと婦人会が中心となり季節託児所を開設 (同年)
- 古平町全域に貯蓄組合が結成される (三八年)
- 学校給食が始まる(三九年)
- 古平・美国間の海岸道路が完成し開通式を行う(四〇年)
- 沢江婦人会が結成(同年)

故郷

渡 迎 嘉 之

故郷の山河が悠久に変わらぬものであつて欲しい。余儀なく古平を離れた人々にとって、その想いは一層強烈なものがあるでしょう。

だが、自然を太古のままの姿で維持するのは難しいものがあるようです。

余市からのあの曲がりくねつた山道から今の海岸道路が開通して、永い間の「陸の孤島」から脱皮し、流通面はもとより、日常生活のあらゆる面での恩恵は多大なものがありました。

しかし、その為には新しいトンネルが次々と掘られ、旧いトンネルが壊されたりして、海岸線はすっかり変貌してしまいました。

子供の頃に走り廻って遊ぶこ

とができた砂浜も失せてしまつて、その代わりコンクリートむき出しの無味乾燥な物体に埋めつくされてしまいました。自然の浸食作用の結果で致し方ありませんが、沖にも投入されたブロックを見ると、すっかり人工的な海岸風景になってしまいました。

そんな海を眺めることのできる高台には、家族旅行村が建設され、色とりどりの屋根や建物が垣間見られるようになりました。

また、深い原始林に覆われていた六志内も山を切り拓き、橋を架けトンネルを掘り、快適なドライブコースとなりました。

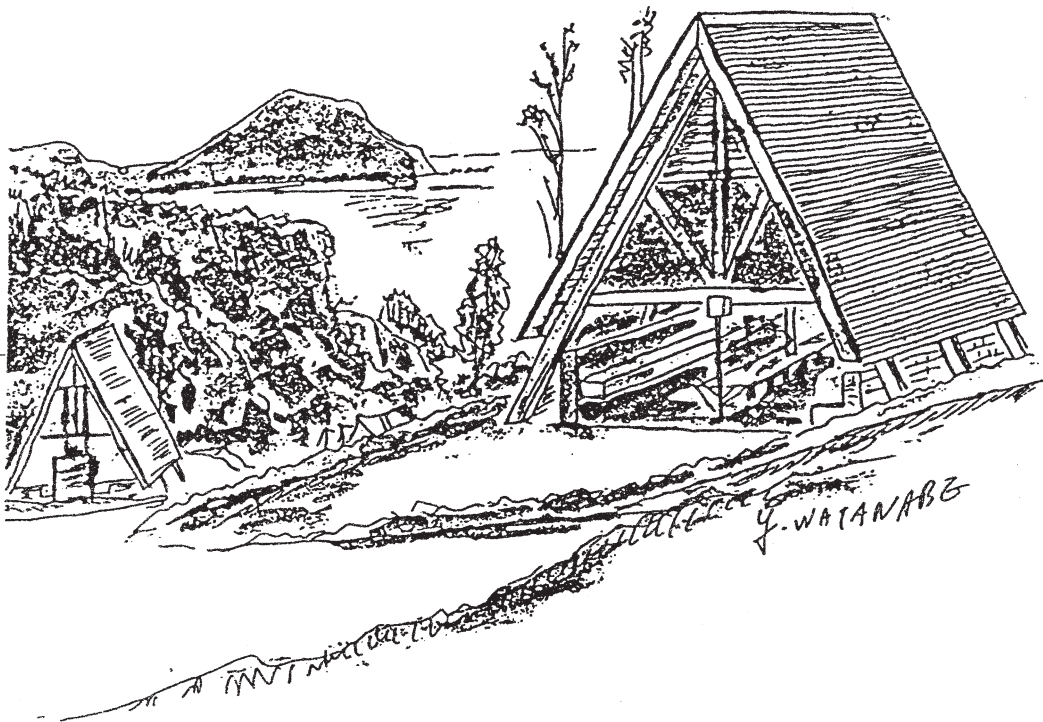
暮らしの豊かさや便利さを求める人間の叡知は、次々と自然を破壊し、近代的な街並みに造り変えて行きました。

観光や福祉の充実という時代の要求にも応えて行かなければならない、そんな世の中の風潮です。自然の変遷も仕方ないことかも知れません。

でも、せめて故郷の山や海や

河が、いつまでも昔の姿であつて欲しいと願うのは、単なる感

傷的な想いでしょうか。
〈スケッチ・家族旅行村〉



まままままままままままま

火渡り神事(一)

まままままままままままま

琴平神社宮司

山口 文彦

一、古平郡総鎮守琴平神社御
由緒・御祭神

古平郡総鎮守琴平神社は、慶應元年(一八六五)五月に箱館奉行所へ願ひ出て、古平御用所より丸山の麓新地町三十四番地に社地の割譲をうけ、京都より御神体を下付され、慶應三年五月に仮社殿を建築し鎮座。明治四年(一八七一)七月に神殿・拝殿を造営竣工した。(棟梁・費用は不明)

御祭神は、大物主神(オウモノヌシノカミ)、八重事代主神(ヤエコトシロヌシノカミ)、保食神(ウケモチノカミ)、崇徳天皇を奉斎し、古平郡一円を氏子として、毎年七月九日宵宮祭、十日を例祭日とし、十一日

に還御祭を斎行している。(以後、社殿の焼失、再建、移転については、古平町史第一巻、七三八ページを参照)

二、火渡り神事の由来

年に一度斎行する例祭に、氏神様が御社(おやしろ)を出られ、各町内を御巡幸し、直接氏子の人達の生活をご覧いただくために、御神輿渡御(おみこしとぎよ)をするわけであるが、御神輿渡御中の罪や穢れを忌火(いみび)によって払い清めてから御社にお入りになる。

一般に、「火渡り」と言われている「火」は清めの篝火(かがりび)である。本来は、御神輿がその火を渡って清めるのが主意である。現在では種々の事情で御神輿を昇ぐことが少ないので、御神輿の先導をする猿田彦が先ずその火の安全を調べ、確かめるためにさきに火渡りをするのであるが、この方が主となっている感がある。

現在の御神輿渡御行列の形態が

定かではないが、「古平町史に明治十三年、氏子の寄付により神輿を新調し、祭典の渡御に使用するようになった。」という記述があるところから、それ以後のことと思われる、時代と共に形態が整い、また変化してきたものと思われる。昭和二十四年五月十日に発生した西部地区の大火の際に、社殿はもちろんのこと、神輿をはじめ諸道具の一切を焼失したわけであるが、その後氏子各位の奉納、寄進により、現在まで整備され続けてきたわけである。

過去、道路が未舗装の時代には、参道の入り口に忌火を燃やし火渡りをしたのであるが、道路が舗装された現在、舗装されていない御旅所(おたびしょ)である浜町恵比須神社境内(七月十日の夜)と、七月十一日の夜還御祭前に、本町の「みどり公園」地内との二度執行している。

次いで、「火渡り神事」「御渡入り(みといり)」の様子を描写してみると、

火渡り斎場(さいじょう)に到着した猿田彦は、これからはじまる火渡りに備え、面をかむり直し朱の装束(しょうぞく)一本歯の足駄の鼻緒に霧吹きして充分に湿らせ、準備の整ったところで、楽人の打ち鳴らす太鼓と笛の調べに合せて立ち上がり、後方に据えた御神輿に異状が無いか「御改め」(おあらため)をする。御神輿の周りを廻ぐり、力縄をゆすっては確認し、終わってもとの位置に戻ったところで篝火に点火され、紅い炎が空中に舞い上がり、いよいよ火渡りの開始を告げる。燃え盛る炎に向かって先ず、警塩係(けいえんがかり)が、次いで大麻係(おおぬさがかり)が抜い清め、獅子舞いが抜いの舞いを舞い終わったところで、大樽(おおさかき)が火渡り、一段と太鼓、笛の音が高まり、いよいよ猿田彦の出番である。

(以下、次号で完結)



日誌

十六年八月十二日午後十二時、風帆船千羽丸二乗組古平出帆、翌正午マデ二積丹御神岬沖、八月廿五日、馬関港ヨリ川汽船名舩丸ニテ神戸へ向ケ、午後十二時出帆、三時二三田尻寄港、廿六日午前六時二上ノ関室津寄港、午後一時伊予三ツケ浜寄、十二時今治、廿七日午前五時多度津寄港、廿七日午後六時神戸へ着港、柴町通六丁目丸山忠様

日誌 上

名 達 文 吉

十六年八月十二日午後十二時、風帆船千羽丸二乗組古平出帆、翌正午マデ二積丹御神岬沖、八月廿五日、馬関港ヨリ川汽船名舩丸ニテ神戸へ向ケ、午後十二時出帆、三時二三田尻寄港、廿六日午前六時二上ノ関室津寄港、午後一時伊予三ツケ浜寄、十二時今治、廿七日午前五時多度津寄港、廿七日午後六時神戸へ着港、柴町通六丁目丸山忠様

ソレヨリ日々南風ニテ三日間沖出シ、支那地山ヲ見ル、十七日ヨリ東北風ニ相成、十九日ヨリ列風雨、廿日大時化、廿二日午前八時頃長州馬関港へ入船、宮崎屋喜太郎殿方ニ止宿、八月廿三日午前十時、千羽丸馬

これは、名達文吉さん（名達博さんの祖父）が明治十六年八月、弁財船で商用のため、大阪まで往復した時の旅日記です。原本もほほこの大きさで、旅行中のことや、さらに当時の物価についての記録もあります。なんとか全文を読み取ることができましたので、当時のことを知る貴重な興味ある文書としてご紹介をします。

関港ヨリ兵庫へ出帆、八月廿五日、馬関港ヨリ川汽船名舩丸ニテ神戸へ向ケ、午後十二時出帆、三時二三田尻寄港、廿六日午前六時二上ノ関室津寄港、午後一時伊予三ツケ浜寄、十二時今治、廿七日午前五時多度津寄港、廿七日午後六時神戸へ着港、柴町通六丁目丸山忠様

ヨリ、十時発十一時大阪着車、ソレヨリ人力車ニテ北堀江三番町、林為次郎殿方へ立寄、午後一時発車ニテ神戸へ帰着ス、兵庫泊、午後五時頃千羽丸兵庫へ入船、九月一日午後発車ニテ再び大阪二上リ、北堀江六丁目昆布仲買商、河崎繁蔵殿へ着ケリ、神戸三ノ宮ヨリ大阪梅田間、汽車三十銭”（以下次号）※文中×印は判読できなかった文字です。



現在手がけている古平町史が、古平を「ふるさと」とおもう人たちの願いが結集してつくられるならそれは素晴らしいことではないだろうか。「せたかむい」

は、そんな願いをこめて発刊されました。みなさんの力によって発展が期待できそうです。